

I はじめに——バラエティーを検証しても意味がない？

倫理である。

検証である。

そんなカタい言葉を2つも看板に入れているBPO放送倫理検証委員会が、バラエティーについてあれこれ言う。

もうそれだけで、バラエティー番組制作者やタレント・芸人諸賢からブーイングが聞こえてきそう。実際、この夏から秋にかけて、委員会がバラエティー問題を審議していると伝え聞いた放送関係者から、

「バラエティーっていうのは、良識や社会通念を笑いのめして、揺さぶって、ものの見方を自由にするものでしょ。おたくらに目の仇にされて、放送倫理で縛られたら、バラエティーなんか成り立たない」

とか、

「バラエティーを理屈っぽく検証するのは、ネタ明かしするみたいなもんじゃん。笑いに理屈なんかないんだから、検証したって意味ないっすよ」

そういう文句なのか、不満なのか、ひと山あった。

別段私たちは、バラエティーを目の仇になどしていないし、ネタ明かしのような検証をするつもりもない。そもそも委員会がバラエティーを取り上げることにしたときも、あれこれ言おうと考えたわけではない。

「あれ」と「これ」しか言わない。

私たちはそう決めていた。たくさんのことを言って、結局、制作現場が窮屈になる。それこそ常日頃、委員会がもっとも心配していることだからである。

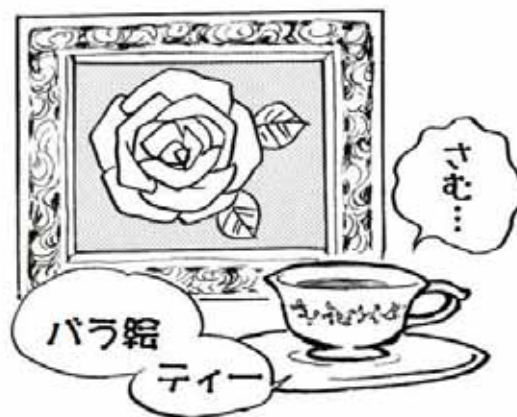
「あれ」と「これ」に入る前に、ひとつ、はっきりさせておきたい。

*

委員会がバラエティー番組を検討テーマとして設定したことには理由がある。

日本の放送界が、放送法と電波法によって直接に行政の監理下に置かれ、しばしば行政指導の対象になっていること、言い換えれば、公権力を監視すべき放送メディアが、公権力によってじかに監理・指導されるといいういびつな状態にあることについて、委員会はこれまでもたびたび疑念を表明してきた。

その状態のもとで、この四半世紀のあいだに行政当局によって行われた「注意」「厳



レビ・バラエティー番組の制作者が、ここで述べられていることを叩き台に、それぞれあれこれ議論して、バラエティーを盛り上げるための踏み台にしてもらいたい、ということである。

叩き台である。踏み台である。であるからして、踏まれても、叩かれても、委員会は文句を言わない。むしろ本望と心得ている。

それでは、「あれ」の方から始めたい。

このあと、すぐッ。

